谷川俊太郎＋枡野浩一 対談

「はるかなる息子へ言葉を届けたい」歌人は詩人に相談をした

「これじゃあ離婚するよ」

枡野　お久しぶりです。前に雑誌で対談したのは、二〇〇三年の末くらいでしたね。ちょうど僕が離婚した後で。＊1

谷川　対談でもその話をしたんだよね。枡野さんとは、そういう危機的な状況のときに会うことが多い気がする。

枡野　そうなんです。相変わらずいい状態じゃなくて、最近は母が倒れて入院中なんです。それに、ずっと息子にも会えないまま。もう一〇歳になったんですよ……。（その後、看病疲れで父も別の病院に入院）

谷川　ぜんぜん会えてないの？　よく映画なんかだと、父親が物陰から子どもがどうしてるか見るじゃない。それはやってないの？

枡野　一回やったんです、保育園で。『結婚失格』という離婚を題材にした小説にも書きました。そうしたら、この本を読んだ、法律を勉強中の若い男の人が「枡野さんがストーカーみたいに子どもに会いに行っていて、奥さんからしたら恐ろしい行為だ」（大意）ってツイッター＊2で書いていたんです。結局、頑固な側が勝っているというか。別れた奥さんも、いま三度目の結婚をして子どもが五人いるんですね。

谷川　本当、へえー。

枡野　最初の旦那さんのときの子が一人、僕との間の子が一人、それに再婚相手の連れ子がいて、さらに二人生まれたんです。そうなると、もう入りこめない感じなのは確かで。

谷川　五人も子どもがいて、「一人ぐらい

返してもいい」とか思わないのかな？

枡野　彼女の今のパートナーは、その連れ子のお母さんには会わせているんです。だけど、僕の元奥さんは、その行為自体を「心が不安定になってしまう」って非難する調子でエッセイに書いている。

谷川　「別れた父親に会わせちゃいけない」って信じているわけか。

枡野　結局、その人の人生観との戦いになってしまうんです。僕は普段はわがままな方なのに、この場合は「向こうに譲らなきゃ」って気持ちがあるから、よりこじれているんだと思うんです。そのへん、同じようなトラブルにあった人が身近にいないので。

谷川　そうだよね（笑）。別れた奥さんは、子どもに枡野さんのことをどういうふうに言っているんだろうね。スパイしてくれそうな共通の友人いないの？

枡野　それが、僕と別れた奥さんのどちらかに二分しちゃったんです。ふたり共通の編集者もいるんですけれど、やっぱり仕事だからか何かを聞いても曖昧な返事が来るし。

谷川　子どもの様子はぜんぜんわからないの？

枡野　情報は、本当にちょっとしか入ってこないんですけれど、息子は僕に似て、運動ができないらしいんです。それに勉強もできなくて、将棋だけが好きなんですって。それで、去年、『僕は運動おんち』って小説を書いたんです。とてもお気軽な青春小説なんですが、息子が読んだら、「ああ、お父さんもそうだったんだ」と思うかなって。今はそうやって、書くものに子どもへのメッセージを暗に込めるしかできなくって。『結婚失格』もカバーを外した表紙にメッセージを詩として書いたんです。それでも隠れるようにしたのは、「本文に堂々と載せるのは違うんじゃないか？」と思ったから。

谷川　枡野さんの本を元奥さんは読んでいるのかな？

枡野　読んでないと思います。あるときまで送ったりもしていたんですが。『結婚失格』も、主人公の「速水」があまりいい夫じゃないようにフェアに書いたんです。読んだ人はみんな、「これじゃあ離婚するよ」って言う。

谷川　フィクションなんだよね？（笑）

枡野　ええ、主人公の男はＡＶ監督に、

奥さんはドラマ脚本家にして、エピソード一個一個もつくっています。でも、実際に経験したことをもとに書いたんです。別に「いい人」と思ってほしいわけじゃないんですが、「(元)奥さんが読んでくれるといいな」と思っているし、子どもが大きくなって読んだときに「こんなことがあったんだ」と思ってもらいたいなと。

理系話をする父・歴史のテストをする父

枡野　谷川さんは三度結婚されていますけれど、お子さんに会えない時期はありました?

谷川　ないです。二番目の妻の子どもで、別れたときには子どもも大人になっていましたから。

枡野　ずっと交流があったんですね。お子さんたちは、小さいころから「お父さんは詩人の谷川俊太郎だ」という意識をもっていたんですか?

谷川　自分たちは思っていないけれど、学校で父親の職業を聞かれて恥ずかしかったみたい(笑)。

枡野　「お父さんは詩人」ってなかなか言えないですよね(笑)。

谷川　そう、それもずっとついてまわるからね。娘は今ニューヨークでぜんぜん違う仕事をしているから関係ないけど、息子のほうは音楽で、一緒に舞台に出たりしているから、どうしてもね。何よりぼく自身、「哲学者・谷川徹三の息子」っていまだに書かれる。

枡野　お父様とは良好な関係だったんですか?

谷川　ひじょうに淡泊な関係ですね。

枡野　最初に詩を発表したときも、お父様に読ませたということですが。

谷川　大学にも行かずにぶらぶらしてたから、「お前、これからどうすんだ」みたいな話になったんです。それで詩のノートを渡した。彼は若いころに詩を書いていたから、ある程度はわかったんです。丸つけたり三角つけたりするから、「なんだ、この野郎!」みたいな感じだったんだけど(笑)。それで三好達治さんのところに持っていってくれたわけだから、いちおう認めてもらえたんでしょうね。

枡野　僕の場合、思春期には親とあんまり良好な関係じゃなかったんです。むしろ離婚してから仲良くなりました。あと

歳を重ねて、だんだん父親に似てきたんです。敵と味方が極端に分かれたり、物忘れが激しくていつも書類なくしたり。「血筋って恐ろしいな」ってときどき思うんです。その分、父親がよくわかるようになってきた。

谷川　お父さんとは何か衝突があったの？

枡野　事件はないんですけれど、思春期の男ってそうじゃないですか？　本当にいやでした。「日航機事故」ってありますよね。あれ、父がいつも乗っている便だったんです。ニュースを聞いたときには「あ、死んだのか」と思ったぐらいなんだけれど、その日は偶然に乗らなかった。そのときに「自分は父親が死ねばいいと思ってるんだ」とびっくりして。いま振り返ると、そこまで憎まれるべき父親ではないんです。単に理系な人で、子どもとの会話が「風はなぜ吹くか？」とか理系話ばかりだったんです。谷川さんも、お父様が哲学者だと……。

谷川　うちは、コミュニケーションがなくて済んでいた親子なんです。ぼくはひとりっ子でしょう。もう完全にマザコンで、母親がまた一〇〇％愛してくれた。それで、父と母とぼくは、小説家の丹羽文雄が三角関係として書いたことがあるぐらいの関係だったわけ。父はぼくが生まれた直後から浮気をしているしね。彼はだいたい離れた座敷でずうっと仕事しているんです。ご飯も一緒に食べないのがふつう、一緒に遊んでくれることもほとんどなくて、遠い存在でしたね。話すようになったのは、ぼくが学校に行かなくなったころからです。たまに一緒に旅行すると、「この場所は誰の城だったか？」って。

枡野　歴史のテストだ（笑）。

谷川　すごくいやでさ。そういうときも、母親経由で「やめてほしい」って言うんですよ。父親の方も、何かあると母親を通して言う。「君子の交わりは淡きこと水のごとし」って故事があるけれど、本当に対立とか軋轢とかなかったです。

枡野　もうずっと離れた感じで？

谷川　ただ、父親観はいろいろ変化していきました。いちばん大きな変化は、うちの両親は、ふつうに仲良くやっていると思い込んでいたのね。だけどそうじゃなくて、もうゴタゴタがたくさんあったわけ。それからもうひとつは、母が認知

症になったときの父の態度ですね。もう典型的な「日本の男」で、自分は手を出さない。「インテリってのはダメだ」って思いましたね（笑）。

枡野　小さいころから「お父さんはインテリだ」って理解していました？

谷川　そんなことはなかったけれど、なにしろ本がずうっと壁みたいにある家じゃないですか。それに何か書いているわけだし。検印紙って、むかし本の奥付に著者が判子を押してたやつだけれど、それを母親の手伝いでやるわけですよ。コタツの上に何百枚も並べて、押していくわけじゃない。「友だちのお父さんとは違うことをやっている」って意識はあった。まあ、ぶきっちょな人だから、子ども目線で話しかけるのとか絶対できなかった人。

いい詩を書くより、食ってかなきゃ！

枡野　谷川さん自身は、初期から子どもに向けた詩も書いていらっしゃるし、そのへんは「反面教師」だったんですか？

谷川　ぼくは枡野さんとは違って、最初っから商売。三好達治にいちおう認められて、「文學界」に載って、徐々に注文が来だす。でも、ぼくは大学に行っていないし、「どうやって食っていこうか」がいちばん大きな問題だった。それで「書くしかない」と思って、来る注文でできることはぜんぶ引きうけていたんです。子どもを対象にしはじめたのも、マーケットとして、いわゆる現代詩よりも童話とか童謡のほうが金になると踏んだからなんです。

枡野　それはたいへん明確な姿勢で、すがすがしい。

谷川　みんなに嫌がられますけどね、詩はそういうもんだと思っていないから。十代の終わりから「商売でやるんだ」とはさすがに考えていなかったけれど、「なんとか食わなきゃいけない」というのが、「いい詩を書こう」という意識よりもはるかに強かったのは確かなんです。あと、ぼくは「詩人になろう」って思ってなかったから。たまたま、詩みたいなのが書けただけの話なんです。

枡野　運動が得意そうなところもそうだし、谷川さんは詩人っぽくないですよね。昔、詩人たちが海辺で撮影した集合写真

を見たことがあるんです。詩人たちはみんなガリガリなのに、谷川さんだけはスポーツマンみたいなんですよ。

谷川　日に焼けててね、なんかかっこよかったんだ、あのころ（笑）。

枡野　「この中で詩人じゃない人、誰？」って言われたら、みんな谷川さんを指すんじゃないかって。

谷川　「詩人とはこういうもの」って先入観が枡野さんにもあるんだ。みんなそうなんだけれど。

枡野　でも、だからこそ、谷川さんはジャンルのエッジというか輪郭をつくる仕事をされてきたのかもしれませんよね。

谷川　どうなんだろう。昔から詩壇みたいなものが漠然とあったわけです。中だけで完結している感じの。それがすごくいやで、「誰にでも読んでもらえるような詩を書きたい」というのが最初からあったんです。

私生活と公的な作品のもつれ合い

谷川　「子ども相手」の最初の仕事は、歌でした。同い年ぐらいの友人が芸大の作曲科にいて、夏に北軽井沢で遊んでいるときに「一緒に歌をつくろうよ」といってはじめた。ぼくらは「童謡」という言葉がいやでね。「新しい子どもの歌」と言っていました。

枡野　子どもの歌には、おもしろいものが多いですよね。へんてこなメロディだし、歌詞がたのしくて、カラオケに行くと歌うんですよ。

谷川　それは、テレビが出てからなんです。それまでの童謡にも名作はもちろんあります。だけど、童謡そのものが「黄色い声の少女歌手が歌うもの」だって決まっていた。いやらしいものだったんです。それが、『みんなのうた』とかテレビ番組で創作の歌が出るようになってからは、おもしろいものがどんどん出るようになってきた。

枡野　そうやって時代ごとにかたちを変えつつ、童謡詩は昔から連綿とあるわけですよね。それに、童謡とか絵本は、子どもが最初に接する。詩にもとても近いですよね。ひらがなで書いてあって、改行してあったりする。前に絵本をたくさん読む仕事をしたことがあるんです。そのときの感想は、「絵本界を牛耳ってい

るのは谷川さん一家だ」っていう（笑）。「これがおもしろい」ってピックアップしていったら、谷川さんか、最初の奥さまの岸田衿子さんか、三番目の奥さまの佐野洋子さんので。（共著『私が1ばん好きな絵本 改訂版』参照）

谷川　オレ、大人向きのものだって書いてるんだよ（笑）。でも、このごろ、略歴に「詩人・絵本作家・翻訳家・脚本家」なんて列挙されるんですよ。それがすごくいやでね。「詩人だけにしてくれ」っていうの。

枡野　僕も「歌人だ」って言っているんですけれど、勝手にエッセイストとか小説家とか付け足されてしまう。肩書きがいっぱいあるの、かっこわるいですよね。

谷川　それに、そういうふうに分割してしまうと、書き物の質が変わってしまうじゃないですか。こちらとしては、分けて書いていないのに。詩人の立場でエッセイや小説を書いていると見た方が、ずっとおもしろいと思うんだけど。今の人って、何でも分けたがるんですよね。まあそう呼ばれてしまうくらい、絵本とか歌詞とか、子どもに向けたものをずっと書いてはきたんですね。でも、ぼくは枡野さんと違って、書きものが自分の子どもと結びつくことはほとんどなかったですよ。

枡野　そうなんですか。たしかに、「自分のことを書くけれど、違うものに変換している」と以前おっしゃっていましたよね。

谷川　そう、ぜんぶフィクションという意識ですね。ただ、『けんはへっちゃら』『しのはきょろきょろ』って、二冊の短い童話集があるんだけれど、そのときは「子どもの名前をつけた絵本や童話を残しておいたら喜ぶんじゃないか」って（笑）。もちろん一緒に暮らしているわけだから、子どもの生態がある程度は自分の身体のなかに入っていて、それがストーリーや描写に反映はしている。

枡野　みんな、「子どもが生まれたから、子どものために書いたんでしょう」みたいなことを言いますよね、その方が通りもいいから。

谷川　そういうものだと思っているらしいけれど、職業的なもの書きって違うと思う。だから、枡野さんの書きかたはユニークに見えるんです。子どもじゃなくても、「この本はわたしの夫に向けて書

いてるんだ、夫はこれを読んで考え直してくれればうれしい」みたいな発想をする作家っているのかな？「○○に捧げる」という献辞はあるけどね。でも枡野さんくらい私生活と公的な作品がもつれ合っているのは珍しいと思う。恥ずかしい感覚とかはないの？

枡野　そこは欠けているかもしれません。男性性が強い人だと恥ずかしいのかなあ？

谷川　男性性、女性性じゃないよ、ふつうの人間は恥ずかしいんですよ（笑）。だんだん、枡野さんがふつうじゃないことがわかってきたぞ！

枡野　とくに離婚のことは、男性作家は絶対語らないですよね。谷川さんは例外かもしれないけれど、高橋源一郎さんくらいでも「比較的書いてる側」なんじゃないかな。

谷川　私的なものは相当内部で変形させます。枡野さんはほとんど手紙に近い。

枡野　なぜなんでしょうね。自分で疑いをもったことがないからわからないです。それがないとリアリティがもてないのかな。

谷川　ぼくの詩で、私生活上のものが混ざったものは『女に』しかないんです。この詩集は、「佐野洋子とのことを生まれる前から死後まで書こう」というコンセプトがあって連載した。本にするときには本人の意見も聞いて、いろいろ直したんですけれど、いまだに朗読するのが恥ずかしい。

枡野　僕は『女に』がとても好きなんですが、そこが伝わるのかも。

谷川　そうかもねえ（笑）。書きかたの次元が違うんですね。

枡野　僕も、もし子どもとずっと一緒に住んでいたら違ったかもしれません。僕の場合、息子が三歳のときから会えていないので、いまだに夢に出てくるのが三歳の姿だったりする。だから、勉強も運動もできなくて、将棋が好きな一〇歳の息子って、イメージできないんです。

僕は言葉人間

枡野　谷川さんにCDを送っていただいたことがありましたよね。短いメッセージが添えられていて、「おれも女のことで苦しんだことがある」って。「谷川さん、男らしいな！」と思ったんです。僕

は、どちらかと言うと、子どもに会えないことが苦しいから、離婚を「子ども問題」として受け止めていた。それが、谷川さんはさすが三度も結婚されている。

谷川　なんだそりゃ（笑）。

枡野　「男女問題」として捉えていると思ったんです。「あっ、僕にない視点だ」とハっとさせられました。

谷川　それは、子どもの問題がなかったから。あれば別ですよ、それは（笑）。ぼくだって、小さい子どもを相手が握って離さなかったら、きっと苦しむと思うよ。もっと攻撃的になると思う。

枡野　僕も文章に書いてるから、攻撃的と評されるんですけれど、これでもかなり譲歩しているつもりなんです。仕事なんかで人と対立したときには、僕は強い。正論を言うのがうまいんですよ。でも、向こうの家庭が不幸せになってほしいわけではないし、「子どもに会いたい」「幸福でいてほしい」という願いがある場合、攻撃せずに待つしかないという、怖い構造になっているんです。まあ、向こうには徹底的に嫌われているので、どんな選択をしても嫌われるでしょうけれど。

谷川　なんで嫌われているか、理由はわかっているの？

枡野　想像でしかない「理由」なら……。ただ、長い付き合いの友人は、「枡野さんの言うことは、筋が通っているんだけれど、一緒にいる人を追いつめていく」と言います。二年前、仲の良い仲間たちと会社をつくったんです。でも結局、僕が途中で離れた。やっぱり足並みが揃わなかったんです。彼らがやりたいことと、僕がやりたいことの違いがあまりにも大きかったから。多数決だと僕は負けちゃうけれど、僕には僕の主張があって、正しいと思っているから話し合いをすると、平行線になってしまう。すごい仲良しなのに、一所懸命やろうとすればするほど、溝が深まっていくんです。

谷川　譲って、バランスをとることが苦手なの？

枡野　その会社は、吉祥寺で「四月」っていう小さな雑貨屋をやっているんですが。僕は「市場のニーズはどうか」よりも、まず「自分がその商品を心から愛せるかどうか」を重視するんです。自分が好きでもないのに、商品として「これはいいものだ」という売り方ができない。

谷川　愛せる幅が狭いんだ。

枡野　雑貨屋をやっていくなかで、経験も知識もないくせに突飛なことを言うし、みんなの賛同を得られない。なのに弁が立つから、みんなが追いつめられていくみたいです。あと、会社の仲間に言われたのが、「会って話したときの印象と、文章で意見を伝えるときの印象のギャップが激しい」って。僕は「言葉人間」なので、対面で喋ったことよりも、書いたことのほうが重要なんですよ。対面のコミュニケーションをあまり信頼できていないのかもしれない。表情とか仕草とかの言葉以外の情報を受け止める力が、人より小さい気がします。離婚のときも、弁護士を相手にすると、強くて。話の筋も通せるんだけど、別れた奥さんからしたら、「確かに言う通りだけれど、言葉にはならない部分で不満がいっぱい」って感じなんじゃないかな。

谷川　書く言葉は信用しているの？

枡野　ああ、まえにも谷川さんに、「自分が言葉にできるもののラインがあったとして、そこから外れるものに関してはどう考えてるの？」（大意）って指摘されましたよね？　……いまだにぜんぜんダメですね。自分の譲れない部分が、とても狭く、強固にあるんだと思うんです。

言葉は人間関係

枡野　僕とすごく親しくなった人ほど、「別れた奥さんの気持ちがわかる」って言いはじめるので、「自分はそこまで変なのか」と少しずつ思うようになってきたんです。

谷川　ぼくも「自分が変だ」ってことには、長い間気がつかなかったんです。結婚してどのくらいかなあ、結婚する前からか、「気味悪い」って言われていましたよ。

枡野　そうですか！　それは、ちょっと元気が出て来る。

谷川　ぼくはそれを「詩人という存在」のせいにしていますからね。「おれのせいじゃねえ、詩人が悪いんだ」みたいな（笑）。周囲を見ていても、いい詩を書けば書くほどそうなる。詩人の奥さんが書く思い出の本で、悪口を書いていないものないでしょう？　自分というのが、詩人であることと切り離せないからね。詩を書いていることと、現実生活での他人に対する態度が、どこかでくっついてい

るというのが、だんだんわかってくるわけ。

枡野　劇作家の松尾スズキさんが、僕が離婚について書いた『あるきかたがただしくない』という本を読んでくれて、「書くことには実に誠実な人」と雑誌で紹介してくださったんです。それはつまり、「書くことには誠実、それ以外のことには不誠実」と暗に伝えているような気もして……（松尾スズキ『クワイエットルームへようこそ』文庫解説参照）。それを読んで、自分ではフェアなつもりで書いているし、そうせざるを得なかったんだけれど、生身の結婚生活に関しては、ものすごく傍迷惑だったのかもしれないと思いました。元奥さんの味方になっている人がたくさんいるんですね。彼女の友だちにしても、出版社の人にしても、父親と子どもを会わせていない状態を許している。つまり、「それを許すような事情が向こうにはあるんだ」と想像せざるを得ないから、僕という人間には「何か」があるんだろうと今は思っているんです。

谷川　その「何か」はわからないの？

枡野　わからないんです。どこまでも想像でしかなくって。もともと当事者と対話してわかったことではないですからね。それこそ、別れた奥さんとは離婚がはじまってから一度も対話していないんで。

谷川　特定の女性との関係じゃなくて、枡野さんがほかの人間との関係でどうなるか、ということが、彼女との関係にも反映しているわけだよね。だから、彼女との関係でやっていたってだめだと思うんです。「ほかの人に対して自分はどうか」ってことを考えないと。それはすごい微妙な、「いいか悪いか」という問題じゃないからね。考えるのも大変なんだけど、傾向として「自分がこうだ」みたいなことを摑むと、少し相手に対する態度も変わるんじゃないかな。

枡野　それで思い出したんですけれど、谷川さんは『にほんごの話』という対談集で、「言語は人間関係だ」と言っていますよね。僕が私生活を書くのにためらいがないのは、もともとの性格もあるでしょうけれど、自分のなかの言い訳としては「だって言葉ってそういうものが前提じゃないか」と思っているから……もあるんですよ、きっと。

谷川　そりゃそうなんですよね、確かに。

枡野　「そうじゃない言葉は必要だろう

か」と。短歌を芸術的なものとしてつくっている歌人は多いと思いますが、僕の短歌は、もっと日常的なもので。文学とか日本語とかいうレベル以前に、自分が生きていくうえで生まれてしまった何か……コミュニケーションが生んだ言葉だったりするから。そこにしか責任をもって書けないのかもしれない。でも、結婚前の自分のほうが、何を書くときも自信満々だったんです。運動とか勉強とか事務仕事とか、できないことが多い代わりに、言葉を綴るという、できることだけには自信があったので。今はもう、どんなことにも自信がもてない。『結婚失格』も必死で書いた本だけれど、「これ、文庫になってもいいのかな」とか、確信がないまま何年も経ってしまった感じです（七月に講談社文庫になる予定）。小説も『ショートソング』という本がちょっと売れたんですけれど、それでもぜんぜん自信がもてなくて。あとはもう「需要があるかないか」でしかなくなっちゃいました。

谷川　今、全般的にそうじゃないですか？批評の基準がほとんどないも同然だから。「いい悪い」を決めるのは、もう出版部数しかない感じですよね。「他人が評価してくれれば、それでＯＫなんだよ」と思っていいんだよ、たぶん。

〈後篇に続く〉

註

＊1　「広告批評」二〇〇四年一月号。

＊2　一四〇文字以内の短い発言を入力して、ユーザー相互で交流する、チャットとブログを合わせたようなＷＥＢサービス。